

今昔物語集の語彙形成

——複合動詞の構成を通して——

藤 井 俊 博

一、はじめに

和漢混淆文の語彙の研究の一視点として、複合動詞の構成法の面から考察しようとするのが、小稿のねらいである。

複合動詞を語彙研究の対象として取り上げる理由は、まず、語彙量の多いことにある。通常言語作品で用いられる品詞別の語彙分布において、動詞の比率は、名詞に次いで高く、その動詞語彙の大部分を占めるのは、単独動詞ではなく、動詞＋動詞の複合形式を採用ものが多く見られるようである。複合動詞の構成法には、他に、名詞（居体言）＋す、名詞＋動詞の形式もあるが、右の形式が、複合動詞の形式の大部分を占めるのみならず、複合語全般に視野を広げても、名詞＋名詞の複合名詞に次ぐ高比率であるという^②。

このように、動詞＋動詞の形式は造語力が強く、容易に新語を構

成し得るから、その用語の傾向を見ることによって、ある作品の文面上的個性を知るのにも適していると考えられる。夙に、竹内美智子氏^③は源氏物語の複合動詞に、接頭辞的動詞＋実質動詞や、実質動詞＋補助動詞の形式のみならず、実質動詞＋実質動詞の形式が多数用いられていることを指摘し、これらが漢文・漢語を前提とする語彙であることを述べられた。また、秋本守英氏^④は、平安時代の和文七作品の複合動詞について、時代の下がる方が、また、漢文訓読文の影響の強いと言われるものより和文的であると言われるものの方が、複合動詞が多く、文が長くなる傾向があるとともに、その中に見える併列的複合動詞（竹内氏の実質動詞＋実質動詞に相当するもの）が漢文的なものであることを指摘しておられる。筆者も、続日本紀宣命の複合動詞に同義ないし類義の動詞の組み合わせのものがあり、それらが漢文の詔勅に典拠を持つ用語として生まれたもので

あることを述べたが、これらを考え合わせれば、和漢混清文である今昔物語集の複合動詞にも漢語語彙の影響による用語があると推測される。

本稿はこれらの先行研究をふまえ、今昔物語の複合動詞の構成上の特色を、前項・後項の動詞の用法から考察してみたい。

一、複合動詞の認定と方法

本稿では、動詞＋動詞の形式の用例を複合動詞と認定し、次の観点から考察することにした。

- 1、和文との一致度
- 2、訓点語の包含率
- 3、前項後項の転倒率

和文との一致度を見るのは、むしろ今昔物語集の独自語彙を見直すためであり、その中には訓点語が含まれているのではないかと考えたのである。3は、今昔物語集に特徴的な造語法として前項後項の転倒した形式があることを述べようとするものである。

ただし動詞＋動詞の複合動詞といっても、前項・後項の一方が極度に形式化したものや敬語に関わる語彙は同列に扱うことはできないので、次の方針によって処理することにした。

- 1、「たてまつる」「たまふ」等、敬語補助動詞と考えられるもの

は除く。

- 2、「あゆむ」「あゆぶ」、「かなしむ」「かなしぶ」、「いく」「ゆく」等の音韻上の交替と考えられるものは、別語とは考えない。
- 3、「ゐて(将)」、「もて(持)」は、語性がはっきりしないが、動詞「ある」「もつ」として扱う。

- 4、「いふ」「のたまふ」、「みる」「ごらんず」等の敬語非敬語は、同語として扱う。

- 5、「きたる」と「く(来)」は同語として扱う。

- 6、接頭語的な「あひ(相)」「うち(打)」「かき(掻)」、接尾語的な「あふ(合)」「う(得)」「そむ(初)」「はつ(果)」等も複合動詞の前項後項に含めて考える。ただし、複合動詞の用例が、これらの結合によるものしかない場合は、複合動詞を構成しないものの用例に数える。

- 7、「はしりいできたる」「わらひののしりあふ」等の三つの単独動詞が合した場合、意味の結合の上から2+1または1+2に分け、「はしり+いできたる」「わらひ+ののしりあふ」のごとくに分けた。さらに後者の「ののしりあふ」は「あふ」を接辞的なものと見て単に「ののしる」と同じと見做す。

なお、資料は、日本古典文学大系本『今昔物語集』により、併せて馬淵和夫監修『今昔物語集自立語索引』を利用した。『三宝感応

要略録』『日本国法華験記』は芳賀矢一『攷証今昔物語集』による。和文は、木下正雄『源氏物語用語索引』のほか宮島達夫編『古典対照語い表』を利用して補足した。

三、和文との一致度

今昔物語集の複合動詞の異なり語数は『今昔物語集自立語索引』によって数えると三〇八五種で、そのうち『古典対照語い表』に掲出されている複合動詞と一致するのは、約三分の一の九七六語である。また、源氏物語と比較すると、ア行のみの異なり語数で、今昔物語集八八九例に対し源氏物語一二三五例であった。

このように異なり語数の多い源氏物語に対して延べ語数が多いのが今昔物語集の特徴である。同じくア行のみの調査であるが、今昔物語集の延べ語数は三五八六例であって、異なり語数の八八九例の約四倍になる。秋本守英氏^⑥の御調査では、源氏物語（花散里まで）での異なり語数一〇六三例に対し、延べ語数一七三二例であるほか、土佐日記・伊勢物語・竹取物語・和泉式部日記・蜻蛉日記・落窪物語、等いずれも延べ語数は異なり語数の二倍に満たない。このことは、今昔物語集の複合動詞が各説話ごとに典型的に使用されている事を暗示するであろう。

まずここでは、複合動詞の前項の現れ方によって今昔物語集と和

文の作品を比較する。後に見る訓点語や転倒率も含めて次の規準で分類した。

一、和文で前項動詞・後項動詞のいずれに用いるかによる分類

I、今昔物語集の前項動詞が和文でも複合動詞をつくるもの

A 今昔物語集で前項動詞にしか用いないもの

① 和文で前項動詞でのみ用いるもの

② 和文で後項動詞でのみ用いるもの

③ 和文で前項動詞・後項動詞いずれにも用いるもの

B 今昔物語集で前項動詞でのみ用いるもの

④ 和文で前項動詞でのみ用いるもの

⑤ 和文で後項動詞でのみ用いるもの

⑥ 和文で前項動詞・後項動詞いずれにも用いるもの

II、今昔物語集の前項動詞が和文で複合動詞をつくらないもの

⑦ 和文で前項動詞を単独動詞として用いるもの

⑧ 和文で前項動詞自体が存在しないもの

二、訓点語の包含率（前項動詞の中に含まれる訓点語の総数を、総前項動詞数で除したもの）

三、転倒率（前項動詞と後項動詞が入れ替わった語形で用いられる例数を、各前項動詞数で除したもの）

(表一) 和文との比較による前項動詞の分類

今昔物語集の前項動詞が和文で複合動詞を作る						分類
今昔物語集で前項後項に用いる			今昔物語集で前項でのみ用いる			
和文で前項に用いる⑥	和文で後項にのみ用いる⑤	和文で前項にのみ用いる④	和文で前項後項に用いる③	和文で後項にのみ用いる②	和文で前項にのみ用いる①	
188	37	38	43	8	49	前項動詞数
1767	76	429	146	10	343	複合動詞
9.2	2.1	11.3	3.4	1.3	7.0	複合 / 前項
710(40%)	0(0%)	119(28%)	42(29%)	0(0%)	105(31%)	和文との一致数
6(3%)	3(8%)	7(18%)	0(0%)	1(13%)	7(14%)	訓点語包含率
78(41%)	14(38%)	14(36%)	—	—	—	転倒率

(続)

合計	複合動詞を作らぬ	
	和文で前項動詞が独立しない⑧	和文で前項動詞で用いる⑦
525	95	67
3085	149	165
5.9	1.6	2.5
976	0(0%)	0(0%)
74(14%)	36(38%)	14(21%)
125(24%)	8(8%)	11(16%)

前項動詞によって分類したのは、ある動詞が前項・後項に用いられる度合いが語によって差があるという事を予測したためである。結果を見ると今昔物語集と和文では前項と後項とではやはり差がある事がわかった。

使用度に差がないのは、和文で前項と後項に自由に用いられている⑥と、今昔物語集と和文とともに前項にのみ用いられる①とで、これらは今昔物語集と和文との用法の共通度が大きいものと考えられる。この①と⑥とで前項動詞数は約半数を占め、複合動詞の総数では約三分の二を占める。

これに対して③④⑤は、今昔物語集か和文かの一方で自由度が高く前項と後項とで用いるのに、他方では制約がみられるものである。すなわち、③は和文では後項にも見えるが今昔物語集では前項でし

か用いられない制約があり、④は和文で前項でしか用いられず⑤は和文で後項でしか用いられない制約がある。⑤のように和文で後項にのみ用いられる動詞について、東辻保和氏は後項動詞には後置率の高いものが多い事を指摘されているが、東辻氏が後置率一〇〇パーセントとされた「みだる」「とどまる」「のく」「ふる（触）」（おくる（送）」がここに含まれている事が注目される。

さらに、②は今昔物語集では前項にしか用いないのに和文では後項にしか用いない点でまったく逆の傾向を持つものと言える。数は少ないが、今昔物語集と和文の語構成の方法の差異を示すものであろう。

⑦⑧は複合動詞自体が和文にないもので、後に述べる訓点語との関連など和文と今昔物語集の文体の差にも関わる点がある。

全体としてみれば、①④⑥のグループのごとく複合動詞を多く構成するものほど和文との一致度が高く、②⑤⑦⑧のグループのごと

(表二) 各項の頻度順の並べ換え

順位	1	2	3	4	5	6	7	8
前項	⑥	⑧	⑦	①	③	④	⑤	②
複合	⑥	④	①	⑦	⑧	③	⑤	②
複/前	④	⑥	①	③	⑦	⑤	⑧	②
一致度	⑥	①	③	④	—	—	—	—

く複合動詞を構成しにくいものほど和文との一致度が低く、③はその中間の様相を呈しているようである。

もちろんこれらは大まかな傾向を示しただけで、今昔物語集と和文で傾向が一致すると考えられたグループの中にも、個々の語としては今昔物語集の独自語彙が含まれている可能性がある。これらを次に具体的に検討していきたい。

四、訓点語の包含率

まずここでは、①～⑧の各グループに見られる訓点語の前項動詞を抜き出し検討を加えたい。訓点語の認定は、築島裕博士の『平安時代の漢文訓読語につきての研究』の示された方法による。

① 和文で前項にのみ用いるもの

a、占ふ（和文後項―申す・寄る）

（今昔後項―相す・察す）

b、湿ふ（和文後項―渡る）

（今昔後項―汚る）

c、濯ぐ（和文後項―捨つ・果つ）

（今昔後項―浄む）

d、築く（和文後項―分く）

（今昔後項―籠む・隔つ・廻す・廻す）

e、射る(和文後項―当つ・返す・殺す・取る)

(今昔後項―宛つ・合ふ・頭かす・出す・落とす・懸

く・切る・殺す・居う・戦ふ・立つ・付

く・尽くす・次ぐ・貫く・通す・取る・

臥す)

f、記す(和文後項―置く・続く・伝ふ・集む・留む・漏ら

す)

(今昔後項―置く・遣す・付く・尽くす)

② 和文で後項にのみ用いるもの

a、浮る(和文前項―思ふ)

(今昔後項―行く)

③ 和文で前項後項に用いるもの(用例なし)

④ 和文で前項にのみ用いる

a、哀む(和文後項―おはします)

(今昔後項―悲しむ・貴む・讀む・養ふ)

b、恐る(和文後項―思ふ・尊む・申す・惶く)

(今昔後項―合ふ・怪ぶ・敬ふ・怖づ・思ふ・貴む・

歎く・恥づ・迷ふ・喜ぶ)

c、屈る(和文後項―歩く・居り)

(今昔後項―居る・居り)

d、傾く(和文後項―来)

(今昔後項―犯す)

e、怪ぶ(和文後項―思ふ)

(今昔後項―疑ふ・恐る・驚く・思ふ)

f、説く(和文後項―上ぐ・出づ)

(今昔後項―置く・聞かしむ・聞かす・答ふ・知らし

む・宣ふ・止む・教ふ・畢る)

g、学ぶ(和文後項―聞く・知る)

(今昔後項―極む・知る・伝ふ・読む・畢る)

(今昔前項―受く・兼ね・伝ふ・読む)

⑤ 和文で後項にのみ用いるもの

a、覆ふ(和文前項―朽つ・吹く)

(今昔前項―打つ・差す・造る・引く・降る・迷ふ)

(今昔後項―隠す・被ぐ)

b、養ふ(和文前項―撫づ)

(今昔前項―哀む・労る・傳く・悲しむ・取る)

(今昔後項―繕ふ・置く・傳く・肥やす・立つ)

c、切る(和文前項―言ふ・思ふ)

(今昔前項―射る・打つ・押す・搔く・くふ・定む・

摘む・交む・喰む・引く・吹く・申す)

(今昔前項―入る・失ふ・置く・落とす・下す・懸く

・刻む・砕く・食ふ・壊つ・殺す・割く

・捨つ・倒す・取る・去く・放つ・払ふ

・引く・聞く・塞ぐ・伏す)

c、凝る(和文前項―思ふ)

(今昔前項―押す・這ふ)

(今昔後項―屈る)

⑥ 和文で前項・後項に用いるもの

a、畳む(和文前項―押す)

(和文後項―為す)

(今昔前項―打つ・押す)

(今昔後項―納む)

b、転ぶ(和文前項―伏す)

(和文後項―入る・失す・落つ・退く)

(今昔前項―低す・倒る・臥す)

(今昔後項―出づ・落つ・下る)

c、崇む(和文前項―思ふ・労く)

(和文後項―労く)

(今昔前項―貴む)

(今昔後項―敬ふ・立つ・貴む)

d、悲む(和文前項―恋ふ)

(和文後項―思ふ)

(今昔前項―哀む・讚む)

(今昔後項―愛す・痛む・貴む・泣く・歎く)

⑦ 和文で前項動詞を単独で用いるもの

a、極む(今昔後項―知る)

b、苦む(今昔後項―痛む・困こましむ・悩む・煩ふ)

c、殺す(今昔後項―得・畢つ・伏す)

d、授く(今昔後項―与ふ・捨つ・畢つ・畢る)

e、退く(今昔後項―返る)

f、貴む(今昔後項―崇む・哀む・合ふ・仰ぐ・怪む・敬ふ・

思ふ・悲しむ・信ず・讚む・喜ぶ・礼む)

g、貫く(今昔後項―集む・入る・出づ・得・代ふ・捨つ・取

る・儲く)

h、奪ふ(今昔後項―返す・取る)

i、弘む(今昔後項―置く・行ふ・伝ふ)

j、亡す(今昔後項―取る)

k、貧る(今昔後項―愛す)

l、破る(今昔後項―失す・懸る・下る・損ず・散る・残る・

乱る・傷る)

m、彫る（今昔後項―顕す）

⑧ 和文で前項動詞自体が存在しないもの

a、嘲る（今昔後項―合ふ・笑ふ）

b、浴む（今昔後項―^{おぼ}鳴る・畢つ）

c、憩ふ（今昔後項―立つ）

d、痛む（今昔後項―悲む・苦む・歎く・悩む・病む）

e、賤ぶ（今昔後項―蔑る）

f、敬ふ（今昔後項―思ふ・畏る・助く・貴む・敬^つむ・讚む・

向ふ・礼む）

g、圧ふ（今昔後項―討つ・懸る・来る・寄る）

h、闕く（今昔後項―落つ）

i、拵ふ（今昔後項―廻す）

j、買ふ（今昔後項―得・調ふ・取る・放つ・求む・持来る）

k、勸ふ（今昔後項―出す・定む・問ふ）

l、軽む（今昔後項―慢る・咲ふ）

m、来る（今昔後項―遊ぶ・集る・合ふ・現る・有り・至る・

入る・懸る・通ふ・下る・極^ず・坐す・

過ぐ・住む・責む・住す・近付く・着く

・集ふ・照す・臨む・始む・向ふ・宿る

・居る）

n、馳す（今昔後項―集る・至る・出づ・入る・懸く・違ふ・

返る・組む・過ぐ・散す・散る・着く・

上る・向ふ・行く・寄る・渡る）

（以下省略）

右の用例の比較によって、今昔物語集の訓点語の方が造語力が強く、複合動詞の用例が多くなっていることがわかる。

また和文の複合動詞は「あはれみおはしおます」（修飾関係）「ときいづ」（補助関係）などの構成が大半で、対等関係の構成は「なかふ」「あがめかしづく」「かなしみこふ」など小数の例しか見えないが、今昔物語集では類義語の対等関係の構成が主流を占めることがあきらかであろう。このことが④⑤で和文に見える制約を今昔物語集が破る理由となる。例えば、和文で前項でのみ用いられる「恐る」「怪ぶ」は、今昔物語集では複合動詞として結びつき「恐れ怪ぶ」「怪び恐る」のごとく後項動詞に転じるわけである。恐らくは、当時であっても、このような複合動詞の構成は翻訳調の（やや不自然な）表現であると感じられたのではなからうか。

これらの傾向の背景には、今昔物語集では漢語の訓読によって生み出された語彙が豊富であるのに対して、和文では「なかふ」（撫養）「おそれをのく（恐懼）」「かがまりをる」（屈居）などを除いて、漢語の影響が少ない事があるであろう。今昔物語集の複合動

詞と漢語との交渉については、具体的に漢文出典の用語を検討して明らかにするべきであるが、後考に譲る事にした。

また、漢語に出典が得られなくとも、和臭漢文等の文体の中で造られたものがあると思われる。⑦⑧の中でも「来る」「馳す」などを始めとして例の多いものがあるが、峰岸明氏^⑧が記録語特有の語彙とされたものと重なる用例も見えている。

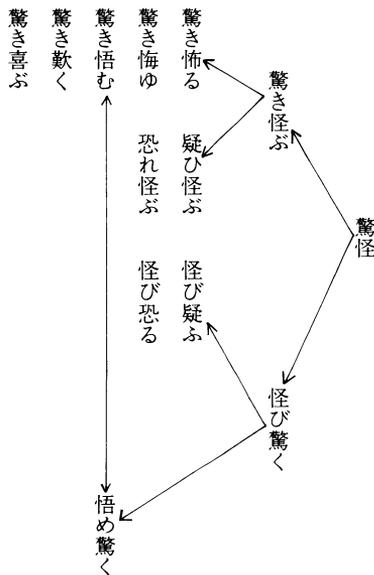
あやしびおどろく(怪驚)・うちやぶる(打破)・おそひきたる(圧来)・はせいたる(馳至)・はせむかふ(馳向)

四、転倒率

表一に示したように、今昔物語集の複合動詞の中には、前項後項の転倒した語形が多く見える。これは、例えば「出で立つ」(出で立つ)「立ち出づ」(立って出ていく)、「見返る」(後を振り向く)「返り見る」(気に懸ける)のごとく和文にも見える現象である。しかし、和文では括弧内に示したごとき意味の使い分けがみられるのに対して、先に示した今昔物語集の例は意味の変化を伴わない対等関係の構成であった。

表一の今昔物語集の前項動詞の中で、転倒例の見えるのは、総数五二五例の中二二五例(二四パーセント)であり、それから造られた複合動詞の数(異なり語数)は総数三〇八五例の中の三五四例

(十一、五パーセント)であった。これは、同時期の宇治拾遺物語や源氏物語などと比べて倍以上の高率である(表四参照)。しかも、今昔物語集では単純な転倒による方法のみならず、前節でみたような類義語を組み合わせる方法によって、豊富な語彙が形成されると考えられる。例えば、「驚き怪む」は、出典に類出する漢語「驚怪」の訓読から生じたものであるが、その派生語は多岐に渡る。



大漢和辞典によると、「驚怖」「驚悔」「驚歎」「驚喜」「怪疑」などの漢語が見られるから、右の複合動詞には漢語に支えをもつものもあるであろう。漢文の用例のないものは、漢語的発想による造語法によって作り出されたものと言えようか。

次に今昔物語集および源氏物語・宇治拾遺物語の転倒例を挙げる。

表(三)

(I)「今昔物語集」(度数二以上)

度数	動詞	結合する動詞
八	たふとむ	あがむ・あはれむ・うやまふ・かなしむ・しんず・ほむ よろこぶ・をがむ
六	きたる つたふ かなしむ とる	あつまる・くだる・せむ・ちかづく・むかふ・よる いふ・うけたまはる・きく・ならふ・ひろむ・まなぶ あはれむ・あいす・くゆ・たすく・なげく・なく あはす・いる・おく・かふ
四	あはれむ いたむ おそる にくむ わらふ なげく なく ののしる ゆく	かなしむ・たふとむ・ほむ かなしむ・くるしむ・やむ あやしむ・おづ・はづ いとふ・せしる・にくむ あざける・あなづる・いふ おもふ・うれふ・おぼす かなしむ・さけぶ・なげく さわぐ・とふ・もとむ いづ・すぐ・すすむ
二	あやしむ あつまる うたがふ おふ くだる くるしむ こしらふ せむ たすく つくる とほる	うたがふ・おどろく あつまる・きたる あやしむ・おもふ うつ・とらふ かへる・きたる いたむ・なやむ いふ・をこつる うつ・きたる かなしむ・すくふ あらはす・うつす すぐ・ゆく

はしる	おる・たつ
ほむ	あはれむ・たふとむ
ゆるす	かへす・はなつ
よろこぶ	かなしむ・たふとむ

(II)「源氏物語」(度数二以上)

度数	動詞	結合する動詞
二十	おもふ	あつかふ・あふ・いそぐ・いとなむ・いふ・いらる・う たがふ・おとす・おどろく・かかづらふ・かしづく・し のぶ・たづぬ・なげく・ねがふ・のたまふ・へだつ・み だる・むつぶ・よろこぶ たつ・はなる・むかふ
三	いづ かく たつ とぶらふ みる	すさむ・まぎらはす・みだる いづ・かくる・さわぐ まある・みる・まうづ おもふ・かへる・きく ちる・ゆく
二	あかる いとなむ いふ かよふ きく つく のたまふ まぎらは す よる	おもふ・つかうまつる おどす・おもふ く・まるる つたふ・みる おはします・しむ おきつ・おぼす おはす・かく おはす・かへす

Ⅳ 「宇治拾遺物語」(全例)

度数	動詞	結合する動詞
一	いだし とる いたす いづ おもふ かく かへす きようず さげぶ すぐ たづぬ つく(突)	おもふ・す・みる つどふ・ある あわつ・まどふ いづ・はしる いる・わく やる たつ おもふ つづく
二	あつまる さわぐ たつ	
三	あひ	
つどふ	あつまる	

表(四)

転倒例	複合動詞	転倒例率	
354	3085	11.5%	今昔物語集
182	3701	4.9%	源氏物語
52	1246	4.2%	宇治拾遺物語

今昔物語集の動詞に特徴的な点は、訓点語であり、かつ、精神活動を示す語が上位を占める事である。「たふとむ」「かなしむ」「あはれむ」「いたむ」「おそる」「あやしむ」などがそれぞれあり、結合する動詞の「うやまふ」「しんず」「ほむ」「よろこぶ」「をがむ」「あいす」「くゆ」「なげく」「なく」「くるしむ」「おづ」「はづ」な

どの類義語が結びつき、今昔物語集の説話を形成する常套語句となる語彙が生み出されている。

これに対して、今昔物語集と同じ時期に作られた宇治拾遺物語には、説話文学上の共通面が従来指摘されているにも関わらず、今昔物語集にみられるような特色はみられない。これは、両書の時代や内容(仏教説話か世俗説話か)の差異にもよると考えられるが、今昔物語集の編者の文体の特質や独自の語彙形成の方法による面が大きいと思われる。

また、源氏物語では「おもふ」を含む複合動詞が多いが、これは紫式部の独自の心理描写であろう。この点、精神作用を表すための語彙形成の方法は今昔物語集と異なっていると云える。逆に、今昔物語集と和文で共通する転倒例も存する。

- 1 あそぶ―たはぶる
- 2 いづ―はしる
- 3 うたがふ―おもふ
- 4 おもふ―なげく
- 5 さわぐ―のしる
- 6 かへす―やる
- 7 きく―みる
- 8 つたふ―きく
- 9 とふ―たづぬ
- 10 なむ―ある
- 11 まうす―つたふ
- 12 わたる―すむ
- 13 よる―ある

右の中で「あそびたはぶる」「さわぎののしる」「ききみる」「つたへきく」「とひたづぬ」などは前項と後項を入れ替えても意味や

構成の変わらぬ並立関係の複合動詞である。これらは「遊戯」「喧騒」「見聞」「伝聞」「尋問」などの漢語を支えにしていると考えべき蓋然性が高い。

今昔物語集の転倒例は、いわばこれらの和文の中にも見える造語法を最大限に応用し、独自語彙を作り出す方法として意識的に多用したものと考えられる。次の例のように、今昔物語集に転倒例の見えるものが、和文でその一方しか見られないものがある事も今昔物語集の独自の語彙形成の結果である。

- 1 いる―きたる(いりきたる)
- 2 うれふ―なげく(うれへなげく)
- 3 うとむ―おもふ(おもひうとむ)
- 4 かかやく―ひかる(ひかりかかやく)
- 5 かたる―つたふ(かたりつたふ)
- 6 さげぶ―なく(なきさげぶ)
- 7 とる―おく(とりおく)
- 8 とる―かふ(とりかふ)
- 9 なく―かなしむ(なきかなしむ)
- 10 まなぶ―つたふ(まなびつたふ)
- 11 もとむ―さわぐ(もとめさわぐ)
- 12 やしなふ―かしづく(やしなひかしづく)

13 わらふ―いふ(いひわらふ)

(注) 括弧内の語形は和文での語形

和文の語形の特徴として、前項の音節数が後項の音節数より必ず短いか同じである事が指摘できる。このことは、今昔物語集でも漢文の原典の二字漢語を翻訳するのに短音節+長音節の形式になるように前項と後項とを転倒する事からも窺える。例えば、「法華験記」の「悲泣」「悲歎」「聞見」は「なきかなしむ」(四例)「なげきかなしむ」(二例)「みきく」(一例)と転倒して訳されている。ただし、「かなしみなく」「ききみる」のような直訳形は見えないが、「かなしみなげく」の例が一例あるから、今昔物語集では漢語の直訳によつて、和文での原則が破られているといえる。

右とは逆に、今昔物語集が短音節+長音節で、和文が長音節+短音節となる例外は「つとめおこなふ」(今昔物語集)「おこなひつとむ」(源氏物語四例・大鏡一例)である。今昔物語集の方は「勤行」の直訳として生じたものであるが、和文で「おこなひつとむ」となる理由はつまびらかではない。憶測を加えれば、源氏物語で仏道修行を表現するのに「おこなふ」が六五例、「つとむ」が六例であるから、「おこなふ」を主として「つとむ」を補助的に用いる意識によるものかも知れない。

五、結び

以上、今昔物語集の複合動詞に見える独自語彙の特徴として、

一、漢語の訓読語を多く取り入れた事

二、その結果、訓点語が多く混入した、類義語の並立関係の複合

動詞が生じた事

三、構成要素となる単独動詞は、精神作用を表すものに偏る事

四、類義語の並立であるため、前項・後項を転倒したり、また、

前項・後項の一方を漢語に必ずしも依拠しない類義語に置き

替える事によって語彙を形成している事

などの諸点を指摘した。

これらの特色は、奈良時代の続日本記宣命や、平安時代の三宝絵詞などにも顕著な傾向であつて、翻案文学の系統に属する和漢混淆文の一面面であらう。これらが、宣命体という漢文の訓読文を表記するのに適した文体を採っている事も、和漢混淆文の一つの方向を示すものであらう。



従来は、和漢混淆文の目印語として字音語を扱うのがほとんどであつたが、本稿の指摘したとき漢語の翻訳語などは等閑視されがちであつた。確かに中世の軍記物語などでは翻訳語よりは字音語の方が和漢混淆現象の中心であり、その意味で字音語の表現の効果や意味を考察しようとする事は当を得たものであつたであらう。しかし、筆者は仏教歌謡や仏教説話などの文体は、漢文の「和らげ」から発した、平易化を旨とする文体であると考えたい。そこに見える複合動詞は漢語表現をふまえたものが用いられ、仏典の世界を庶民にいきいきと伝える役割をはたしたに違いない。

さらに今昔物語集において、巻二十を境に訓読体から和文体に傾く事が指摘されているが、「和らげ」の過程で生成された複合動詞が、漢文の出典を持たない説話を表現するのにどの程度用いられ得るかといった点を明らかにする必要がある。また、院政期から中世にかけて作られた作品を広く渉獵して、今昔物語集の（特に巻二十以前の）語彙がどの程度一般性を持つものであつたのかを明らかにする必要があるが、今後の課題としたい。

注

- ① 宮島達夫「古典対照語い表」（笠間書院 昭和四六年九月）の統計によると名詞の比率は五四、三％、動詞の比率は三六、四％であり、他の品詞は三％未満である。

- ② 阪倉篤義「語構成の研究」（角川書店 昭和四二年三月）

- ③ 竹内美智子『平安時代和文の研究』（明治書院 昭和六一年五月）
- ④ 秋本守英「語構成と文構成」（『王朝』創刊号 昭和四四年九月）
- ⑤ 拙稿「続紀宣命の複合動詞―漢語との関係を中心として―」（『國文學論叢』平成元年三月）
- ⑥ 秋本守英氏の注④論文を参照。
- ⑦ 東辻保和「いわゆる複合動詞後項の意義論的考察―源氏物語を資料として―」（『国文学攻』第六九号 昭和五十年十月）
- ⑧ 峰岸明『平安時代古記録の國語學的研究』東京大学出版会 昭和六一年二月